

# 地図読みについての基礎知識

## ■地図に親しむ

山登りに地図は不可欠。初めての場所に出かける時、地図がなければその場所の様子も分からない。第一、目的地にたどり着けない。街中なら随所に道標や所在地の表示があるし、人に聞くこともできる。だが山登りには、いずれもない。迷ったら自力で元の道に復帰しなければならない。そんな時、地図は最大の援助者となる。地図の援助を最大限引き出すためには地図をよく知る必要がある。地図に対して苦手意識をもつ人は少なくないが、苦手意識の大きな部分は、地図の特徴を充分理解していない点にある。地図の使い方を知る前に、地図の特徴や種類等について知っておきましょう。

## ■地図の種類と特徴

### 地形図



正式には、国土地理院が発行している1万分の1、2万5000分の1、5万分の1地形図の3種類の地図をさす。特に登山では、2万5000分の1地形図や5万分の1地形図が使われる。日帰りの登山には、2万5000分の1地形図が地形表現も見やすくてよい。ただし2万5000分の1地形図は同じ面積の場所を表すのに5万分の1地形図の4倍の地図が必要になるので、縦走などの長い登山では5万分の1地形図の方が使い易いこともあります。

### 登山用地図

本屋さんの店頭には、出版社(昭文社など)が発行する山域別登山地図がある。これらは、国土地理院の5万分の1や2万5千分の1地形図を基に、それぞれの山城に精通した人が、登山道、小屋、水場、地名、コースタイムなどを記入したもので、とても役に立ちます。しかし、登山用地図は細かい地形が読みとりやすく、また、登山用地図が発行されていない山域も多いので、やはり国土地理院発行の地形図がハイキング・登山の基本となります。

### 概念図

ガイドブックなどにのっている地図で、山頂や尾根、谷筋、登山道などだけを簡単に書いたものです。コースのあらましを頭にいれるには大変役立つ地図ですが、これだけでは山を歩くのに不十分で、そこからコースの特徴を詳細に読み取ってナビに利用することは出来ません。

### 案内図

登山口の入り口には、山域の案内図が大きな立て看板として設置されていることがある。同様なイラスト風の地図は、観光案内所やビジターセンターなどでも配布されている。山域の概要をつかむことはできるが、極端に地図作製者が強調したい情報だけがでていることが多い。そのため、第一に位置関係や行程を正確につかむことができない。またその地図だけで、途中の地点で現在地を把握することもできない。こうした地図はあくまで参考程度にとどめましょう。

## ■地形図を手に入れる

かつては大都市にある代表的な書店等では地形図を扱っていた。ところが今や地形図の販売枚数は激減し、身近な書店で地形図を購入することはかなり難しくなってしまった。これは地形図に問題があるというよりも、道路地図を初めとしたさまざまな地図が販売されるようになったことにも大きな原因があるのだろう。しかしがっかりするにはおよばない。今やインターネットで地形図を閲覧することはもちろん、全国の地形図をオンラインでも購入することもできる。インターネットで地形図を見る国土地理院のサイトには、2万5000分の1地形図を閲覧できる「ウォッチず」というページがある。索引図があるので、そこから見たい地形図を探して閲覧できる。やや画像が粗いがカラーであり、さらに情報も最新である。その他の登山用地図に関しては、昭文社の「山と高原地図」はたいていの大型書店には揃っています。

## ■地形図のよみ方

### 「習う」より「慣れろ」

地図の読みかたを身につけるためには、ごく基本的な知識を学んだあと、まず実際に山で地図を広げ、周りの地形と地図での表現のしかたを見比べる事です。これを繰り返す内に、だんだんと地図の見方が解ってきます。山に行ったらおっくうがらずに、地図を出して眺めましょう。

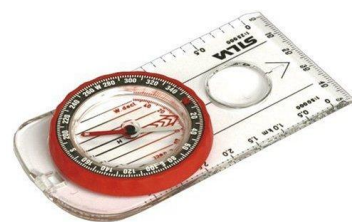
### 等高線を読みこなす

地図を読みとる上で、一番大切な要素は等高線です。等高線は地表面の凹凸を平面の紙の上に表示するために考え出されたもので、同じ標高の地点を結んだ線を地図上に描いたものです。いわば、山を一定の高さの水平面で輪切りにした時にできる輪郭線を、平面に幾つも投影したものです。等高線の間隔は「2万5千分の1」地形図では標高にして10mごとに、「5万分の1」では20mごととなっており、5本目ごと(つまり「2万5千分の1」では標高50mごと、「5万分の1」では標高100mごと)に太線で表されています。等高線の間隔が空いてるほど地形は緩やかで、混んでいるほど急峻です。逆に等高線が低い方から高い方に入り込んでいるのが谷です。一般に、尾根は等高線が丸みをおびており、谷はV字型に鋭角に曲がっています。

### コンパスの使い方

地図を使う補助として、コンパスも必ず持っていきましょう。正しい方角を知って地図との対比をし易くしたり、現在地の確認、樹林や霧で展望が閉ざされている時の判断、遠くに見えている山の名を調べる時などに、なくてはならないものです。コンパスにはいろいろな種類がありますが、スウェーデン・シルバ社のシルバ・コンパスが使いやすいのでお勧めします。

コンパスの針が指すのは磁北で、地図の真北(地図の上方)とは少し西にずれています(日本では5.~9.)地図の欄外に、「西偏〇.〇'」に記入されていますから、それを考慮します。予め地図上に磁北線(分度器やコンパス等利用)を間隔をおいて何本か引いておくと便利です。



### 地図を正しく置いてみよう(正置)

これがすべての基本。正置ができれば怖いものなし。  
コンパスの用途は大きく分けて次の3つがあります。

- ①現在地の確認・・・地図上のどこに自分がいるのか。
- ②目標の方向確認・・・目標はどの方向にあり、自分の向かっている方向で正しいのか。
- ③目標物の確認(同定)・・・見えている目標物、たとえば山頂や建物が何かを地図上で調べる。



この3つの確認をコンパスと地図でできるようになれば90%使いこなせたといえます。そのための基本は、地図を正しく置くこと(正置)。ただ地図を開いて地面に置くと、実際の北と地図の北(地図の上方向)とは一致していない。これをコンパスを使って一致させていくことを正置と呼んでいる。基本は正置とわかっている、山を歩いていると、つつい面倒くさくなって、地図を広げずに地形を読み、方向確認やルートファインディングをしてしまいがちだが、地図を地面に置いてみると、すべてが解決することが多い。必ずやってみて欲しい基本技術です。